

水 土 里 レ ポ ー ト

投稿月日	令和3年7月15日
タイトル	水源林育成事業「皮むき間伐 きらめ樹体験 ～500年後の未来のために～」
水土里レポーター名	水土里ネット那須野ヶ原 星野 恵美子

令和3年7月大雨の中、水土里ネット那須野ヶ原の水源林育成事業をサポートするため設立された「1000年の森を育てるみんなの会」の理事長が、静岡県富士宮市にてNPO法人森の蘇り主催の皮むき間伐の体験に行ってきました。皮むき間伐とは、桧や杉の樹皮を剥き、数年間かけて立ち枯れさせ、その後伐採するという間伐の方法で、子どもだけでなく大人でも楽しめ、専門的な技能が無くても関わることができる方法です。皮をむいた木材は1年～5年ほど山に放置し、木の含水率が20%程に下がったところで伐採を行います。含水率が下がり、運び出すのも比較的容易にできるという利点があります。当地の水源林の森の間伐に活用すべく期待が膨らみました。



また、このNPO森の蘇りでは製材工房も持っており、間伐した木々を床材や壁材等を製作しています。本体験会では、この工房の技術指導まで一連のメニューとなっており、初めての工房での作業に苦戦しながらも、床材を製作させてもらい、用水の安定供給のために始めた水源林育成事業の未来が拓けた感触を確認しました。



戦後の日本では、雑木林を木材に適したヒノキ、杉に植え替えて行ったが、コストの安い外国の木材が使われるようになり、森は放置されてきました。手入れの行き届かない森の木々は暗く、草花も育たず、動物も鳥も来ない荒れた森になっており、土石災害が発生する心配のある森は国土の4割にもなっているそうです。

しかしながら、日本では海の向こうの原生林を切り倒し輸入し続け、世界最大の木材輸入国になってしまっているのが現状です。日本の森を木材として利用することは、世界の森を守ることに直接つながるのです。